



雇用を生み、地域を元気に。
それが地域を未来へつなぐ。

米づくりができること。
ご飯を食べ続けられること。
その価値を考える分岐点に、今、立っている。

米づくりの課題に対応するため、農地の集積や集約化、スマート農業、新たな販路の開拓、農産物の加工など、地域農業を存続させるさまざまな取り組みが進められています。

その1つに、一迫地区で米や菊、米粉、米粉パンなどを生産する有限会社川口グリーンセンターがあります。同社は、令和6年度(第63回)農林水産祭の多角化経営部門で内閣総理大臣賞を受賞しました。

これは、米の生産に加え、米粉の生産や加工などに取り組み、農業経営の多角化を長年にわたり進めてきたことが全国的に高く評価されたものです。

これまでの取り組みを同社代表取締役の白鳥正文さんに聞きました。



有限会社川口グリーンセンター
代表取締役
しろとり まさふみ
白鳥 正文 さん(一迫清水町)

地域を未来につなぐ

今、振り返って見ると、米の流通や価格形成をめぐる制度が変わり、需要と供給を踏まえて、米価が形成される現在の仕組みになったことが、当社にとって転機でした。

これにより米の卸価格が下降したことで、採算を確保することが難しくなり、自ら米を飲食店や消費者へ直接販売することにかじを切りました。

ただし、それは簡単なことではありません。米を仕入れる飲食店などとコミュニケーションを常に取り、迅速な対応を続けること、必要な量を確実に届けることなど、信頼を得ていくためには、日々の積み重ねが大切になります。

また、6次産業化の取り組みにも力を入れています。

平成12年に始めた米粉事業は、主食用米の転作に取り組むため始めたものです。しかし、当時、米粉が売れず、米粉パンにして販売することで活路を見い出そうとしました。

また、米粉パンの販売店舗の運営ノウハウを伝えるフランチャイズ事業も軌道に乗り、現在では、加盟店が北海道から沖縄までの18店舗に広がっています。

農業用資材の価格上昇など、農業を取り巻く環境は厳しさを増しています。そのような状況でも、農業で雇用を生み、地域に住み続けられ、これが地域の元気につながると思います。これからも地域を元気に、そして、未来へつなぐため、社員や地域の皆さんと共に、しっかりと歩んでいきます。



大地に立つ

主食として毎日何気なく消費してきた米は、いつも店先に山積みされ、当たり前のように買えるはずでした。しかし、令和の米騒動は、その当たり前のことを改めて考える大きなきっかけになりました。

一方、米を生産する現場では、高齢化による担い手の減少、上昇する農業用資材や農業用機械の価格上昇など、さまざまな課題に直面しています。それでも、市内には、米づくりと共に地域を未来へつないでいこうと、地域農業を支える人たちがいます。

有限会社川口グリーンセンターの白鳥代表取締役は言います。「農業で雇用を生み、地

域を元気に、そして、未来につないでいきたい」と。

担い手が将来にわたって農業を続けられること、そして消費者が安心してご飯を食べ続けられること、その両方が地域の農業と食を未来へつなぐために大切です。生産者と消費者、それぞれの立場から米の生産や価格、そして食べ続けられることの価値を考える分岐点に、今、私たちは立っています。

栗原の大地が今年も黄金色に染まり、稲穂が風に揺れる。栗原にとって、当たり前前の光景が、これからも当たり前前であるために、今日も担い手たちは、地域の明日を見つめ、栗原の大地に力強く立ち続けます。

一迫地区で米や菊、米粉などを生産する農業法人の代表。15代続く米農家。指導農業士として、県内や市内の米農家の後継者を受け入れ、長年、米の生産方法などの指導を続けてきました。

また、自社水田と水稻の生産受託で、90ヘクタールほど耕作を行う他、販路拡大に向け、米国や仏国にも米を輸出し、栗原の米を世界へ届けています。